

週刊朝日

6/29号

2001年

300yen



宅間容疑者が
元妻にあてた「復縁状」

アスキーの経営離れたベンチャーの旗手

西和彦

ベンチャーの雄、パソコン草創期を築いた男。西和彦氏のデビューは華々

しかった。だが、その後は順風満帆ではなく、先月ついに自ら起業したアスキーの経営から外れた。そんな西氏が、アスキーへの思い、恩人だった故大川功氏の思い出、マサチューセッツ工科大学で取り組む壮大な研究などを語った。

20分
激写



「僕の人生11年ごとに転機」

アスキーは僕の分身でした。

子どもではないですね。子どもには、親から独立した自分の意思があるでしょう。ただ、経営から離れて、つらいとか寂しいというよりも、今はお互いによかったなと思っています。

アスキーは創業者のくびきがとれたし、僕もアスキーから独立できた。もちろん僕には「創業者」という肩書はとれないので、今後の活動でも、そのタイトルを汚さないようにしなければならぬと思っています。

アスキーの社員には、一人ひとりが、自分の仕事を毎日楽しんでほしいと思います。

西和彦氏(45)は早大在学中の77年にアスキー出版(現アスキー)を設立し、ベンチャーの旗手として一躍名をはせた。パソコン業界の草分け的存在でもある。だが、アスキーは多角経営の失敗などで業績が悪化、98年1月に故大川功氏が率いるCSK・セガグループの傘下に入った。西氏は同年6月に経営悪化の責任を取って社長を辞任、取締役

に就任した。昨年から副会長を務めていたが、今年5月11日、直接経営に携わらない特別顧問に退いた。

今年3月16日に大川さんが亡くなったときに、アスキーの経営から外れることは覚悟していました。

僕は社長のとときは「嫌なやつだった」と思います。権力志向、有名人志向、金持ち志向だった。けれど、社長を辞めて普通の人になって、それがなくなりました。周囲にいた人間の半数以上は離れてい

きましたが、その後の人間関係がすごく楽になった。昔はカーツとなると2、3日怒っていたのに、最近では2、3分で「まあ、いいか」と思うようになって、取引をやめた

い銀行に「カネを返せ」と迫られる夢も見なくなりました。故大川功・CSK名誉会長は、後ろ盾として西氏を支えてきた。西氏は、今年5月に、東京ステーションギャラリーで学芸員をしていた長島真里さん(28)と3度目の結婚式を挙げたが、その披露宴会場に

も、亡き大川氏の席をわざわざ準備していたという。

大川さんには夜中でも電話で呼び出されました。意見を求められたり「通訳しろ」と言われたり。電話でいきなり「ほけえ」と怒られ、訳もわからず「ごめんなさい」と謝ったこともありました。僕は当時はブツブツ言っていたけど、こうして電話がかかってこなくなると、とても寂しい。こんなこともありました。僕がアスキーから数億円借金をしていたときのこと。大川

超多忙な毎日は今も変わらない

さんは、

「カネを貸してやるから、会社には返せ。会社から借金するのはやめろ」

と言ったうえで、

「アスキーの株価を上げたら借金は返せるのだから、一生懸命仕事しろ」

と叱咤激励してくださった。あのときは本当にうれしかった。

今も僕は借金王ですが、少しずつ返しています。先日ある雑誌に「主にアスキー株を担保に引き出した借金が50億円近い」と書かれましたが、それは多すぎる。それにこの10年でだいぶ返したもんなあ。

僕は「大川さんからお金の賢い使い方を教えてもらったような気がします」。

「あぶく銭と汗の結晶のお金は使い方が違うんや。あぶく銭は下カンと使え。汗の結晶のお金はしつかり使え、いや使うな」

とおっしゃっていました。

実際、会社がコツコツ上げた利益は一円たりとも無駄に使われなかった。一方で、株で稼いだ個人のお金で、起業

家やスポーツ選手を支援したり、気前よく寄付したりされていた。

98年に大川さんがMIT（マサチューセッツ工科大学）に寄付する話が持ち上がったとき、MITの総長に、「毎年4億円ずつ、10年間で40億円を寄付してくださいませんか」

と依頼されると、大川さんは、

「ワシをなめとるなあ……」

一気に払ったらナンボや」と答えられたのです。

こうして翌日、キャッシュでボンと33億円を振り込まれました。周りにいた関係者はびっくり。それが、デジタル技術を使った教育施設「未来の子供たちのための大川センター」の建設に使われることになりました。

西氏は現在、アスキー特別顧問のほか、MITの客員教授、国際連合大学高等研究所の客員教授、尚美学園大学教授、それに祖母が創設した須磨学園高等学校の校長などを務めている。MITでは産学協同のプロジェクトに取り組

んでいる。

僕の人生はこれまで、11年ごとに転機がきています。11歳にわんぱく坊主からまじめな学生に、22歳からはエンジニア、33歳からは経営者だった。44歳からのこれからの11年間は「IT（情報技術）」を使った教育がテーマです。

MITでの研究プロジェクトのひとつが、インターネットのホームページを世界中の言語で読める「多国籍言語自動翻訳システム」の開発です。一度ブラウザ（インターネット閲覧ソフト）に組み込めば、だれでも簡単に使えます。

10ドルで買えるパソコンつくる

世界のホームページの多くは英語で書かれていますが、日本人にとって英語の壁は大きい。だが、このソフトを使えば自動的に日本語に訳してしまふ。英語と日本語に限らず、たとえばフランス語のホームページをロシア語で見たり、スペイン語のページをアラビア語で見たり、世界中の

人が母語で世界中のホームページを読めるのです。対象言語は、国連加盟の189カ国の公用語です。自由自在な翻訳で、言語の壁はなくなる。

MITの学生を動員して2006年完成が目標です。もともと開発費が数十億円かかりそうなので、各国政府や企業に協力をお願いしつつあります。中近東の財団などからすでに寄付をいただきました。

デジタルデバイスという言葉葉がある。IT化が進んで、インターネットやパソコンの恩恵を受けられる人とそうでない人の間に情報格差が生まれる状態を指す。世界的に見て、デジタルデバイドをもたらし一因は、パソコンの高価格にもある。

デジタルデバイドを解消するために、MITでは、10ドル（約1200円）パソコンの研究もしています。コストを下げるために、パソコンの心臓部に当たるCPUやメモリー、ビデオ機能などを一つのチップ（半導体）にまとめます。試作品は1年後をめどにできそうです。

実際にはMITでやるのはそこまでで、パソコン本体はメーカーが作りますが、たとえば、ケースに段ボールも使い、電源は太陽電池、集積回路を取り付ける基板はボール紙といったパソコンも考えられる。パソコンが10ドルなんて信じられないと人は言うが、今では100円ショップで買える電卓だって、発売当初は100万円以上しました。夢物語ではないと思います。

西氏はいま、1カ月のうち日本に2週間、米国に10日間、残りが欧州という生活を送る。日米欧で携帯電話を使い分け、ノートパソコンと携帯用プリンターを持ち歩く。

会社の経営とは違ったやりがいを感じています。実は、「インターネットの発達で主権国家がどう変わるか」をテーマに政治学の博士号取得も狙っています。楽しい毎日です。寝る前にカモミールのハーブティーを飲んで、ぐっすり眠っています。でも、機会があれば10年後にはビジネスの世界に戻りたい。

構成 本誌・中村智志